

黒川能の里王祇会館 - 紹介動画(4.昭和45年豆腐まつり)

[テキスト:この白黒ビデオは1965年から1966年の間に撮影されました。元の作品を尊重するために、フィルムはこのビデオ用に拡張なしで複製されています。]

東北地方の冬は厳しいです。

山形県にある庄内平野には田んぼがたくさんあります。冬になると雪に埋もれ、日本海から冷たい風が吹きます。外から見ると、まるでエネルギーのない世界です。しかし、住民の生活に足を踏み入れると、予期せぬリズムカルな鼓動が彼らの中で脈打つように感じるかもしれません。

庄内平野の南には櫛引があります。この一見静かな地区は、豊作を祈願する地元のお祭り「王祇祭」に向けて、活気の兆しを見せ始めています。王祇祭は毎年2月1日と2日、日本の旧正月の日付で開催されます。

祭りの10日前に、地元の守護神(王祇様)が1年住んでいた地元の住居から春日神社に戻されます。

2日間で何億もの大豆が消費されます。豆腐は焼き上げられ、装飾的な料理として提供され、神々に敬意を表しています。豆腐作りの社交行事は、通称「豆腐まつり」と呼ばれています。

ボランティアの手は冷たい水で凍りつきます。何千枚もの豆腐を切り、串に刺します。

豆腐を焼くための仮設小屋が建てられています。豆腐の製造時に豆乳(おから)から分離して固めたパルプを使用して、火の周りに仮設の炉床を作ります。

村人たちは火の周りに座って豆腐を焼き、火傷を防ぐために手をストローで覆っています。彼らは長い竹の棒と木の枝を使って、豆腐の準備がほぼ整ったときに炉の反対側にいる人々に合図を送ります。

【背景会話】

いよいよ豆腐の出来上がりです。すぐに取り出して豆腐を交換します。村人たちは新鮮な豆腐を渡す前に雪の中に手を置いて、焼く前に新鮮な豆腐を保ちます。

【背景会話】

酒はみなに共有され、徐々に雰囲気盛り上がります。

【背景会話】

ボランティアたちは、炉床にたっぷりの薪を投げます。外は冷たい風と大雪にもかかわらず、小屋の中は気温が急上昇します。小屋の中の温度が上がると、それは熱くなりすぎて冷却が必要になる可能性があります。

ボランティアの1人が小屋を出て、小屋と内部の人々が過熱するのを防ぐために屋根に雪かきをします。

子供たちが学校から戻ってきました。小屋の中から彼らの声が聞こえるようになりました。

地元の人たちは、豆腐を焼くという簡単なイベントを、独自の素晴らしいお祭りに変えます。

【背景会話】

[音楽]

焼き豆腐は大きな箱に入れて外に運びます。炉床のない別の小屋に運ばれ、豆腐を一枚並べて、一晩放置します。一晩中非常に冷たい空気にさらされると、朝までに焼きたての豆腐が氷豆腐に変わります。

その夜、春日神社の王祇祭で行われる能楽のリハーサルが始まります。日中の豆腐まつりの陽気さは、夜にミステリアスな雰囲気へと一転します。

黒川能には500年以上の歴史があると言われています。それは舞台芸術であるだけでなく、神々に捧げられた供物と見なされています。子供たちは神聖なスキルを持っており、不純物がないと信じられているため、子供たちの関与は特に重要です。

[リハーサル]

この少年はたったの4歳です。彼は、祭りの最も重要な儀式の1つである大地踏み(地球を踏みつける)を簡単なリズムで行う方法を学んでいます。

彼はまた、祈りに似た歌をリハーサルしています。リズムカルな効果のために発話が曲に追加されます。

リハーサルは、黒川能が舞台芸術であるだけでなく、神々への供物でもあることを思い起こさせます。

それはますます独特の舞台芸術へと発展しています。

[リハーサル]

雪が降り続けています。豆腐まつりの活気と能の安らぎは、王祇祭の対照的な側面です。

その両方に関わることで、住民は春の始まりを歓迎するのです。